

モンゴル研修旅行を終えるにあたって

Mongolia Study/Training Tour 2006-2012

上野 真城子*

Makiko Ueno

Mongolia 2012: challenges ahead

Since 2006, my seminar students and I have organized and implemented an annual research/training trip to Mongolia. This tour has the following “my” educational purpose at Kwansai Gakuin University: to recommend my seminar students, to go abroad and learn about different people, cultures, and values, especially in a developing country. I selected Mongolia a field of study because I have visited and familiarized myself with the country since 1996.

Mongolia is an impressive place to travel, not only because of the sentiment of years’ of experience and friendships with the people ; this year, for me, is the last year of my professorship at Kangaku before retirement, but also because my students and I have witnessed the country’s amazing power of growth.

After all, Mongolia is so attractive: the beautiful land, the vast desert, herb-fragrant grass land, the open steppe, the gentle mountains, the deep blue sky, the crystal clear lakes. It is one of the world’s treasures, and behind the modernization and urbanization, it has a long history and tradition of nomadic people, and everyone knows about Genghis Kahn.

The grasslands and valleys were once for the herders and their animals, now many have moved to the cities and mining companies for work. The huge Oyu Tolgoi mine project on the edge of the Gobi Desert accounts for roughly 30 percent of Mongolia’s annual economic output. The sheer scale of the mineral wealth estimated 41 billion pounds of copper and 21 million ounces of gold. Mongolia’s gross domestic product grew 17.3 percent last year, and a further 16.7 percent in the first quarter of 2012.

Mining will be huge source of employment and will help improve the living standards of the whole country. The development is inexorably altering the country. It is transforming Mongolia’s landscape, physically and socially as well.

Mongolia’s big challenge is to protect the environment while using the natural resources to develop country’s economic growth and improve people’s living standard. For this purpose, Mongolian people and leadership need to establish a strong, credible government supported by democratic ideals. UCRCA will continue to contribute Mongolia’s future.

Interview with Dr. Sanjaasuren OYUN, Minister of Environment : Mongolia’s democratic future, Cautiously optimistic.

I was fortunate to get a wonderful interview with Dr. Oyuun, Minister of Environment at Parliament House, UB on September 7, 2012.

I have been a good friend with Dr. Oyuun as president of Zorig Foundation for several years. She was elected as a member of the Parliament in the July election, as the party leader of the Civil-Will-Green Party. She was appointed as Minister of Environment. She clearly defined the most important environmental issues for Mongolia and its democracy in general.

She warned that while the country should enjoy its rich resources for the opportunity for economic growth, the mining industry will also bring so called “resource curse” and “Dutch disease”. Also, Mongolia’s geo-political situation means the country should be careful about ideological polarization and resource nationalism. For the future, the nation should educate the young people and open the society.

* Urban Community Research Center for Asia (UCRCA) アジア都市コミュニティー研究センター代表

* 関西学院大学大学院教授

キーワード：モンゴル、経済成長、デモクラシー

Key Words : Mongolia, Economic Growth, Democracy

上野研究室は2006年に初めてモンゴル研修旅行を行い、その後2007年、2008年、2009年、2010年、2011年、6年にわたり研修を重ねてきました。本年2012年は第7回となりますが、私の定年退職の年にあたり、通常の3回生を受け入れることができませんので、外部関係者を含めてUCRCAとの共同活動として、8月30日より9月9日の10日間、視察旅行を実施しました。ここ7年を振り返りつつ、モンゴルの急激な発展と成長に、驚嘆する旅でした。

○「地球儀をこころに」研修旅行のめざすこと。

私の関学での8年間の、学生への基本的な教育の信念は、生涯学び考え、行動する人間、地球儀をこころに、関学のモットーである「地球市民」になってほしいことにありました。

私は大学卒業後四十余年、横道や回り道をしつつ、そのときそのときどう生きるか生きたいか、何が自分に出来るのか、何を自分に課すのか、学び続け、考え続けてきました。

関学に来た2005年以前の20年ほどは、主に米国ワシントンのシンクタンクで「政策研究」に従事しました。厳しい米国での研究生活のなかで、私は「市民社会」「デモクラシー」「政策」といった、人生をかけて希求する価値のある課題と出遭いました。今、私がこの年齢をもって、大学教育の場で出来ること、果たせる責任の一つは、若い学生諸君が、人生に追求すべき、生涯の学びの課題を発見するのを助ける、そうした機会を揃えることで

した。

その機会として、出来るならば学生は大学卒業までに、一度でも外の社会を見、学んでくることが大事だというのが、私の確信でした。日本以外の国、外の世界を知ることによって、よさも悪さも、強さも弱さも含めて、私たち自身と日本自身を知ることができます。そして私たちにとって価値あるものと、他の国や人々にとって価値あるものは違うということ、異なる価値があり、そして異なっていること、違いの中から違いを超えて互いに得るものがあり、国境を超えて、新たなよりよき価値の形成ができるということを学んでほしいということでした。

そして、その中心となる理念は、デモクラシー、コミュニティー、人々の暮らしの向上、成長と環境問題の解決へ関与することにあると考えました。

○モンゴルへ。



そのための適切な対象となる、国およびフィー

ルドをどこにするか。私はすぐにモンゴルが浮かびました。なぜモンゴルであったのかですが、実は私は個人的な事由から1996年来のモンゴルとの交流を持っていました。私の夫は、1996年から約4年間、世界銀行にいた時、モンゴル財務省へ財政アドバイザーとしてウランバートルに赴任しました。1996年当時モンゴルはロシアの衛星国から離れ、市場経済への移行国として厳しい経済状況にある最貧国のひとつでした。ウランバートルは物がなく、レストランも限られ、食糧品、野菜、肉も少なく、政府官公庁に隣接したかなりの良好な住宅とはいえ、暗く汚い階段と、鍵をかけても身の安全に相当の気遣いが必要なくらしでした。私は娘とともに仕事のあるワシントンに留まり、モンゴルに毎年訪れるという生活となりました。その毎年の滞在期間中、私はこの国の人々と生活を学ぶべく、多くの、主に女性たちに会い、友人となりました。

私の年齢と体力においても、慣れ親しんでいるモンゴルになら学生を連れて行くのに適している、モンゴルの「今」に学ぶことが多々あると思いました。当時モンゴルには日本の戦後の貧しさを彷彿させるものがありました。友人からはぜひ学生を連れてきてほしいと歓迎の意を示してくれたので、モンゴル研修は容易に立ち上げることができました。

○研修旅行：モンゴルへの架け橋活動7年



研修旅行では、途上国、移行国の現状、人々の暮らしをみることに、特に貧困層の住宅問題を見ることに、知ること、国際援助、日本の援助を理解すること、調べ歩き、考えることを訓練してきました。

1年目でおおまかなモンゴルの状況、ウランバートルの状況を把握しました。そしてことに都市政策関連ゼミとして、途上国の都市住宅問題が喫緊の取り組むべき課題であることを確認したのが2006年度の成果でした。

この問題解決のためにミクロで有効なことが何かを探ってみようとしたのが2007年の研修活動と調査の焦点でした。援助に関わるさまざまな機関と責任者の方々からの講義を受けました。都市問題と住宅問題の基本を都市居住の原点、コミュニティに置くことが非常に重要であることが、開発理論からでなく、踏査を通じて見えてきました。

2008年度には、日本のJICAによる都市マスタープラン研究を知り、その中でことにモンゴル科学技術大学のPurev-Erdene先生のゲル地区改良の提案と活動に出会い、これへの貢献を考えた調査を行いました。この関係を土台に2009年度の調査は、コミュニティの現状と問題を、子供たち、小中高学生のGISを使った生活圏調査から探ってみることとしました。これは今後のすべての援助及び社会改革のカギとなる、コミュニティ・ビルディングということ、すなわちコミュニティ形成と内発的開発、住民による、住民のための、住民の計画と参加、プロセス、過程をつくりだしていくことが最も大事な活動であるという理念に立ち、私たちが出来る、働きかけの一つとしてのアクション・リサーチでした。

2010年3月には限られた関係者のみでしたが、各年夏調査の中間となる冬季調査を行いました。零下25度Cのウランバートルを訪ね、冬季の都市問題を実感することになりましたが、このときに

9月調査のためのカウンターパートを作り、加えて、ゲルを購入しました。

この経過を経て行われたのが2010年の研修旅行です。この年から、毎回、58番校を訪れ、学校周辺の清掃活動を100人ほどの中学、高校生とともに、半日行うことになりました。それはごみのないコミュニティー、きれいなコミュニティー環境の大切さをともに考えようとする啓蒙活動になりました。1昨年には学校に清掃隊のユニフォームが来ていて、定常的にクリーンアップの日が作られていました。

さらに積極的なコミュニティー意識の醸成を目指して、コミュニティー開発青少年リーダーシップ・プログラム (Community Building Youth Leadership Program) を、Zorig Foundationの協働のもとに58番高校でクラブ活動としてスタートさせました。このプログラムから5人の高校生に大学1年の奨学金を渡すことになりました。

ただし残念ながらこのプログラムは、58番校の校長先生の移動があったことと、指導員を確保できなかったことから、継承が困難であるため、ひとまず終了させました。しかし、この58番高校は、本年、全国700ある学校のなかで、さまざまな活動と施設の管理の良さに鑑みてトップ校として選ばれたとのことで、校長は一部は私たちの交流の結果であろうと感謝の意を表してくれました。



○モンゴル2012年：ジンギスカーンの国は甦る？

2012年のいくつかの数値、人口317万(2011)世界135位、中位年齢26.5歳、人口増加率1.47%(世界81位)、都市人口は全人口の62%、そのうちウランバートル市人口122万人、平均余命68.63年(世界154位)男66.16年女71.23年、識字率97.4%、若年層(15-24歳)失業率9.9%(2010)、貧困線以下人口39.2%(2010)等は、変化したもの、変化しないもの、いろいろですが、その経済成長は1996年当時からはいうまでもなく、2006年からでさえも大きく飛躍するものとなりました。

たとえばGDP 実質成長率17.3%、世界第2位(2011年)、GDP(per capita) \$4,500、産業生産成長率(Industrial Production Growth Rate)37.3%は世界1位(2010年)です。

モンゴルにとって何より大きな変化は、自由主義経済への移行後に明らかになったモンゴルの鉱山資源の「発見」でした。このところグローバルなメディアに報道され世界の注視的となっているのが中国国境に近いゴビ砂漠のなかのタバントルゴイ鉱山(金銅)とオユトルゴイ炭鉱(石炭)の開発です。イギリス、カナダ、オーストラリアなどの国外資源大手企業が採掘を手がけます。この鉱物資源に依存する経済は、国家の産業政策に作用され、そして民主制度をとるこの国の政治のあり方に作用されます。

ウランバートルの景観を変える、高級ヨーロッパの専門店と高級レストランをつめこんだ高層ビルと、トゥール川の河岸にひろがる高級住宅群、そして、一方市周辺の丘陵地をアメーバのように埋め尽くしたゲル地区のスプロール。都心部の車の喧騒と渋滞、工事中的ビルと穴だらけの道路と雑踏、それはエネルギーに満ちたものでもあり、また埃と車の排気ガス、冬場のスモッグは人々の健康を蝕んでいます。そして、所得格差の拡大です。

モンゴルは今、まれにみる国造りの機会に恵ま

れています。なぜなら、豊かな資源立国として成長を約束されているからです。環境の保全を確保しつつ、経済成長の稀有な機会を、豊かな国民生活へ結び、豊かな民主的平和国家がつかれるか、課題と挑戦があるのです。



いずれにしても、一つが唯一絶対のゴールを持っているわけではなく、すべてが、時間、時代に遅れることなく、バランスを見極めつつ、課題を解決しつつ、動いていかなければならないのです。それは政治、経済、社会が、相互にダイナミックにかかわりながら、人々の暮らしの痛みを最小限にしながら、国家を、そのデモクラシーを、強靱に構築しつつ造り上げるという、大きな挑戦です。

この研修旅行は2012年度をもって終了しますが、学生に豊かな経験と思考の課題を様々に与えたと言えるかと確信します。こうした試みが学部で世界市民の育成のひとつとして継承されさらに広がってほしいと願います。

Box: 今回、モンゴル政府環境大臣、私の知人であり、UCRCAのカウンターパートであるZorig Foundationの会長、Dr. Sanjaasüren OYUUNとのインタビューができました。



環境省が4つの重要省のひとつとなったこと、オユン氏が大臣となったことは課題の重要性への首相の認識を示すものです。インタビューの要約は次のようなものです。

①モンゴルの環境問題と経済成長について。

移行期においては環境の問題が放置されてきた。20年の移行期の無視は大きな公害をもたらした。川は汚染され、環境は悪化した。鉱山開発と環境悪化が問題である。小国であり、それほど大きな影響を与えてきたとはいえないが、近年、世界の気候変動には多少の影響を与え、CO₂の増加の2.1%の貢献(?)しているようだ。Green economyを奨励することでよりCO₂の低減につとめる。法制度は整備されているが、実施できるかが問題である。

しかし環境問題よりも経済発展は重要な問題といえる。鉱山開発以外に産業がないことは「不幸な」事実で、鉱山開発はモンゴルの発展にとって不可欠である。巨大な資源を持つモンゴルの鉱山資源生産は、モンゴルという極めて小さな市場では消費できない。資源に飢える隣国、中国への貿易が不可避である。

ここに中国との関係という複雑な課題がある。

豊かな資源とそこから生まれる財源を使って、社会システムの改革も行わなければならない。子供たちを重視する政策を行おうとしている。人口・人間開発省に児童局を設置した。障害者局も作った。(私の念願である。)

②モンゴル民主化について。

民主化の過程については良いニュースと悪いニュースがある。

まずは政府腐敗汚職の問題である。政府腐敗の状況については、Transparency InternationalのCorruption Index 2011によれば183か国中120位であり、10.0の非腐敗国、透明度の高さのランキンググループにおいて、最低国ではないが、2.7と最悪の次のグループである。北欧諸国の9点台以上のグループに比して、旧ロシア圏諸国の中で改善されているが未だ問題が多々あることを示している。

2006年には腐敗阻止法と腐敗阻止局を設置し、2007年には日本から学んで、情報開示法(Freedom of Information Act)を制定、昨年には利益者競合法(Conflict of Interest Act)、こ

れも制度的には整備されたが、実行されるかが最も問題である。

モンゴルは多党制が出来てはいるが、メディアを含めてまだ民主制度が強固とはいえない。また比例制での議員数が確立していない。(オユン氏が党首である)Civil Will Green Party(市民意志緑の党)は5.5%の支持票を得ながら、3議席しか取れない。(76議員定数からすれば4名になる。)

全体として、資源富裕国になったとき、政治家はナショナリストとなり、新たな危機を迎えている。左右のイデオロギーが大衆ポピュリズムをはびこらせる。誰が席卷するかは非常に問題である。極右にも極左にも行ってはまずい。政府保有と介入はある程度必要であり、かつ中道がとても重要である。大国の間で小国の位置をどうとるか、大きなチャレンジである。そして、鉱山は「解決」ではない。

国民がよりよく教育され、より知識を持ち、オープンな社会を作ること、若い世代が、外で学び、国に貢献することがなにより大切である。若い世代に期待する。」

○モンゴリア・ウィークの開催

モンゴル研修旅行とともに、交流と研究活動の発表の機会作りたという学生の熱意のもとに2010年から、モンゴリア・ウィークを開催することにしました。リサーチフェアの期間に三田キャンパスにゲルを建て、モンゴル茶と伝統衣装試着、写真、映像、物品展示、研究プレゼンテーション、Skypeを使ってモンゴル学生との交流などを行い、多くの三田市民に来ていただき、好評を博しました。2012年度には関学の卒業生で三田市民である丹羽建造氏の、モンゴルとの長い民間

交流を知り、多くの貴重なモンゴルの物品を展示させてもらいました。三田とモンゴルと関学との関係が継承されることを望みます。

